

<今回>254回目 2019年3月25日(月)15時~18時 602号室

読書は10冊目「失われた九州王朝」再読

<前回>253回目(19-3-11) 出席者 8名

資料(19-02-25-1)前回のまとめ(清水)

-2)周髀算経の紹介(清水)

-3)屯倉検索結果(肥沼)

-4)北魏、北周、隋、唐の歴史(肥沼)

A 報告 短里の谷本氏の寄稿論文の掲載で終了。次回から「失われた九州王朝」を再読する。文庫本は以前は入手困難であったが、ネットで岡田さんが調べたら7,800円であったので、送料を含めて、千円少しオーバーで入手できるようになる。

B -2)は友人の短里の解説で後で読んでください。少しは分かりやすく書かれている。

-3) 日本書紀の「屯倉」の検索結果が示された。これによると、安閑、宣化期が多いことが分かる。九州王朝史料からの集約とすれば、九州年号が開始されたころ(517年または522年)で全国的な直轄地として屯倉が設置され、全国への支配力を高め、「評」制も実施していった、645年に頂点に達したとの見方が示された。

-4)時代背景として北魏の華北統一の時代を受けて、隋唐に至る過程が示された。(ただ筑紫の磐井の乱と武蔵国造の乱の解釈については慎重に検討しなくてはならない。)

懇親会7名 津多屋13586円(2000・5+1500・2) -586円

C 読書 p330、解説にかえて から (谷本茂氏の寄稿文を掲載)

1)魏志倭人伝の短里 数値を誇大値とせず短里としたのは、安本美典、野津清、そして古田武彦と紹介。周髀算経の計算の結果は76mから77m程度とした。

2)史料批判を慎重に行うことは従来の定説に依拠して史料を見る(読む)のではなくその史料自らの語るところを検討し、その結果を従来の定説と実証的に比較検討するという手続きである。-谷本氏の論である-

3)周髀算経は周の時代(西周 BC1050~BC771年)に行われた天文観測の方法を記載する中国最古の天文算術書である。成立は3世紀初めの頃の注釈、趙君卿、その注に引用されたと書物の中で後漢の劉洪の作と言われる「乾象曆」(206年頃)から時代を特定している。206年から220年(後漢末)という。

4)天文観測の基礎について 周公と商高の間答から3角測量の原理とピタゴラスの定理の応用であることが分かる。

5)髀は8尺の棒のことである。周の地(北緯35度付近)で夏至の日(南中時)に当り8尺(80寸)の棒の影が南北各千里行った所の影が16寸、15寸、17寸の測定値を得て、天地の間の距離、北極までの距離を計算したものである。

6)現代の知識では北回帰線に沿って、太陽は(永遠に遠いので)光は平行線で地球に当り8尺(80寸)の棒には16寸、15寸、17寸の比から角度を算出して、それに地球の半径を掛け算して千里は南76.3km、北76.9kmの値を得た。

次回日程 19-4-8(月) 15時から18時 603号室

-4-22日(月) 16時から18時 601号室

-5-13(月) 15時から18時 602号室

-5-27(月) 15時から18時 602号室

(「邪馬一国の証明」は第231回から254回までとなる)